

## 〔定例講演要旨〕

## 21世紀の歯科医学・医療

東京医科歯科大学名誉教授

小 椋 秀 亮 教授

とき：1994年11月25日

平成6年度東日本歯学会定例講演会が、本学歯学部D-1講義室にて開催されました。

ご講演を戴いた東京医科歯科大学名誉教授小椋秀亮先生は、昭和28年より本年3月まで、実に41年間にわたり、硬組織の生理および薬理に関する教育・研究に従事され、定年により退官なさいました。その間、昭和58年4月より11年間にわたって歯学部長をお務めになり、昭和60年1月からは、「歯学教育の改善に関する調査研究協力者会議」の委員として種々の活動をされ、この会議の成果は、昭和62年9月に「歯学教育の改善に関する調査研究協力者会議最終まとめ」として、公表されております。

今回は、先生の長年にわたる教育・研究経験をもとに、将来の歯科医学・医療についてご講演戴きました。ここに、その概要を報告いたします。

先ず、1991年12月にジュネーブで開催された『“口腔保健の最近の進歩(Recent Advances in Oral Health)”に関するWHO専門家会議』の「口腔疾患の予防」について説明されました。

すなわち、(1)齲蝕の予防に関しては、①フッ化物やシーラントの利用が有効であること、②人工唾液の開発・研究、③ショ糖に代る非齲蝕性甘味料の開発・研究、④クロルヘキシジン徐放性歯面バーニッシュの開発、⑤分子生物学的手法による口腔細菌叢の成立機序に関する研究、⑥免疫学的手法による経口ワクチンの開発などが必要であること、また、(2)歯周病の予防

に関しては、①プラークの機械的除去による歯肉炎の予防、②喫煙、成人性疾患、ストレスなどの危険因子の排除、③口腔衛生指導の徹底、④抗プラーク剤や抗歯石剤の開発と歯磨剤への配合の必要性、さらに、(3)口腔癌の予防に関しては、①タバコ摂取の抑制、②日常診療における診査を重視すべきであること、を示されました。なお、この中で、ビスフォスフォネートはリン酸カルシウム結晶の形成と溶解を抑制するため、歯石形成の抑制のみならず、骨吸収を伴う様々な歯科疾患への応用が期待されているとの説明がなされました。

つぎに、「21世紀における歯科医療の変貌」に関して、話されました。すなわち、①高齢化社会の進行と成熟により、QOLへの欲求が高まり、歯科医療の重点が「治療」から「予防」へと移行していくこと、②歯科医療の領域は、より広く、より科学的な内容にもとづいた医学生物学的専門領域となり、「歯科医療」が「口腔保健医療」に変貌すること、③口腔・顎・顔面領域の保健・医療を継続的に担当できるような幅広い教育を受け、十分に訓練された「口腔科医師(Oral Physician)」が必要となること、④患者教育、口腔疾患の予防、治療ならびに患者の全身的健康の保持に、口腔科医師をリーダーとする「口腔保健チーム」が必要となること、⑤「口腔保健チーム」はコンピュータ・システムと医科・歯科の臨床検査施設の支援を必要とし、同時に、医科のプライマリー・ケア・チーム、

口腔・顎・顔面外科、高度の修復歯科などを行う専門家とともに活動するであろうこと、⑥口腔保健医療施設は種々のレベルで設備、材料等の標準的なセットを備え、かつ高度でしかも適正な価格での治療を行えるようにするために高質で効率の良い歯科医療設備をもつことが必要になること、⑦情報科学の進歩、発展により、診療記録のコンピュータ化、データの転送、CAD/CAMの進歩・発展・教育と訓練の改善がなされるであろうこと、などを説明されました。なお、この中で、睡眠時無呼吸症候群(sleep apnea syndrom)の特徴と対応について触れられ、sleep sprintを用いる歯科的療法の有効性を示されました。

最後に、近い将来におけるわが国の歯科医学、歯科医療面の課題と問題点として、社会環境の変化、すなわち、超高齢化社会、少子化社会、医療費問題の深刻化、女性歯科医師の増加を挙げられ、説明されました。その内容は、以下の通りであります。

#### (1)高齢者(老年者)歯科医療の比重の増大

全身疾患を掌握しながら歯科医療を行うために、歯科麻酔と全身管理技術の必要性が増加する。さらに、医科との協力の必要性が高まってくる。

老人の在宅診療のみでは十分な歯科医療効果が得られる可能性は高くはないため、歯科有床診療機関が増加して行く可能性がある。

口腔の清潔状態の保持は健康維持と密接に関連するため、歯科衛生士のさらなる活用が必要とされ、歯科衛生士教育の高度化が必要となる。

個人開業の形態が減少し、複数の専門医が共同で運営する診療機関が増加して行く可能性がある。

#### (2)小児歯科医療の重要性

丈夫な歯の育成と正常歯列への誘導、および

その保持が必要となる。

高齢化社会におけるQOLに占める健全な歯の重要性が認められてきていることから、小児期における歯の保健や口腔衛生についての母親教育の必要性が増加する。

(3)歯科医学分野の優れた研究者の育成および高度の歯科医療技術を修得した専門医を育成する必要性が増加し、大学院の重視とその活性化が推し進められる。

(4)歯科医療従事者の厚生、福祉分野への積極的な進出の必要性が高まる。

(5)歯科医学・歯科医療情報提供への積極的な取り組みが必要となり、とくに、口腔諸疾患の予防、定期的診察、早期治療の重要性などに関して、地域社会に対する情報活動の積極的な展開を図らなければならない。また、公開講座の積極的な開設や歯科医療ジャーナリズムの確立などが必要となる。

さらに、生涯学習の重要性についても触れられました。

約2時間にわたり、熱く我々に語りかけるご様子は、とてご定年を迎えられたとは思えない若さを感じられました。本学歯学部においては、目下、新カリキュラムの詳細を検討中であり、21世紀の歯科医療を支える人材の養成に携わる者にとって、非常に有意義な講演会であったと思います。また、学生諸君にとっては、将来の歯科医師像をみすえるための良い機会であったと思います。最後に、小椋先生の益々のご健勝をお祈りいたしまして、報告とさせて戴きます。

(東日本歯学会企画担当理事 平井 敏博 記)